

博報財団 第11回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	NGUYEN Oanh Thi(グエン オワイン ティ)
在住国名	ベトナム
所属・役職	ベトナム社会科学アカデミー、漢喃研究所、准教授、上級研究員
招聘回(招聘研究期間)	第11回(2016年9月1日～2017年8月31日)
受入機関	早稲田大学、文学学術院
招聘研究テーマ	「日本とベトナムの漢文訓読の比較研究」—『日本霊異記』と『今昔物語集』を中心に—
研究目的	(一)日本の漢文訓読や訓読の原則について明らかにし、その理解をより深めたうえで、日本の漢文訓読からベトナムの漢文訓読を研究する有効性や意義を明らかにしたい。(二)『日本霊異記』と『嶺南摭怪』の比較研究を通して、ベトナムの変体漢文の様相や特徴を明らかにしたい。(三)『礼記』と『四書』(孟子)『仏説経』の漢・字喃対訳や、そこにみられるベトナムの漢文訓読を、日本の漢文訓読からみた場合、いかにとらえることができるかを明らかにしたい。

研究成果概要:

第一、『日本霊異記』の研究から

松下貞三と中国の李銘敬の論文を参照しつつ、両論文が取り上げる『霊異記』における破格の例を中心に検討した。ベトナムの李・陳王朝における『禅苑集英』や『嶺南摭怪』をみると『霊異記』の漢文はそれらと共通点が見られる。撰者である景戒が『霊異記』を編纂したときに採用した文法は仏教經典の影響を受けていたため、ベトナムと共通点があるのだろう。『霊異記』における漢語の構造と文法構造を分析した結果、日本人の研究者が『霊異記』を変体漢文だと述べることへの理解が深まった。

第二、日本人の専門家による意見・質問をふまえ、ベトナムの変体漢文の研究を展開

主として峰岸明の『変体漢文』の記述を通して、日本の『霊異記』などと同様、ベトナムにも『嶺南摭怪』などの変体漢文があることを資料から確認することができた。日本の「訓」と「訓読」のようにベトナムの漢文訓読も定着していったのではないだろうか。また、ベトナムの漢文資料において、一つの漢字に対して一つのベトナム語の単語が対応しているかどうかを検討するために、ベトナム人が過去、如何にして漢文を学習したか、引き続き研究した。

第三、日本の漢文訓読とベトナムの漢文学習、漢文講読の比較研究—『礼記』と『孟子』『佛説経』を中心に

鈴木直治『中国語と漢文—訓読の原則と漢語の特徴』など、日本の漢文訓読の基礎的な著書を確認した。ベトナムでは漢字以外の表記文字として、「字喃」が普及し、一般に使われるようになり、はじめて漢文からベトナム語(「字喃」)への翻訳が可能となった。また、漢文・漢字を学習するために、四書五経をベトナム語(「字喃」)に訳すことが必要となった。研究を進めた結果、日本と同様、ベトナム人が漢文を学習するためには、訓読が必要であったことが判明した。原則として、原文から離れた訳文を作るのではなく、原文の漢字をそのまま残しつつ、原文の漢字を一つ一つ目で追い、ベトナム語に置き換えながらベトナム語の語順に従って読み進めるのである。日本の変体漢文と同様の現象もベトナムの漢文資料に見られる。訓読が発達する以前には、『日本霊異記』『今昔物語集』と同様、漢字とベトナム語(字喃)とを混淆して記した『嶺南摭怪』もある。日本と同様、四書五経に句読、訓点などの付訓を行い、編纂、印刷したのは、すべて有名な儒者が行ったことであった。ベトナムは日本と同様、教科書と辞典の編纂も重視された。『四書約解』『啓童説約』などの漢文・漢字教科書に付された序を分析すると、一般的な人と子どものために工夫し編纂されたことがわかる。また、進学の順序も大切にされた。前近代のベトナムにおいて教科書と辞典が編纂された目的は一般の人と子どものためであり、暗記を容易にするために韻文を作ることが多い。辞典の中に「亀手」 là nê tay(手がひび割れる)[22a]、「魚漬」 là nước mắm(ナンブラー)[26b]などのベトナム人独自の漢字の用法も見

られる。

展望：

今回の研究テーマのもと、日本の変体漢文、日本の漢文訓読についての先行研究を調査し、日本の専門家からいろいろな意見・質問を受けることにより、日本の漢文訓読と変体漢文、日本の漢文訓読についての理解が深まった。ベトナムの説話集『嶺南撫怪』や碑文をはじめとする漢文資料には、日本と同様、漢文訓読の現象が確認できる。日本の漢文訓読からみた場合、ベトナムの漢文訓読をいかにとらえることができるか、仏典や経書、辞書などの具体的資料とともに明らかにした。帰国後は、日本の変体漢文、漢文訓読の基礎的な理論に基づきベトナムの漢文訓読への研究を次のように行っていくべきと考えている。ベトナムの変体漢文、漢文訓読の展開の諸相の研究(漢文と漢学、漢文と訓読、四書五経の訓読、儒者の読書法、黎朝の訓読、阮朝の訓読、これからの漢文教育)など。ベトナムの対訳辞書・辞典の編纂の諸相の研究(固定化語彙、熟語、歴史的な流れの訓読み、ベトナム語(国語)の歴史)など。日本の漢文訓読の理論を大学で教授し、『日本の漢文訓読からベトナムの漢文訓読の研究へ』という本を編纂して、出版する。

一年間、日本国際文化研究センター、富山大学、東洋文庫、大阪大学、早稲田大学で順番に発表、講演させていただいたことと伝承研究会、説話研究会、漢越研究会に出席させていただいたことも学术交流活動の一環である。日本で研究会に参加することは漢文文化圏に属している日本、韓国、中国の漢文・漢語に関する知識を身につけることができるだけでなく、これまでベトナムで行ってきた漢字・字喃に関する研究の過程で得られた体験を示し、お互いに理解することもできた。帰国後は、日本で発表した原稿を校正し、日本をはじめ、中国、ベトナムの専門的な本や雑誌に掲載する。これまで行ってきた日本の各大学との学術活動・学術的な交流を継続し、日越の漢文学の学术交流を実質的に促進するように一層努力していきたい。

一年間、貴財団の皆様から格別の厚情を賜りましたこと、早稲田大学文学学術院の河野貴美子教授をはじめ、日本の各大学の先生方に熱心にご指導していただいたこと、心より感謝申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。